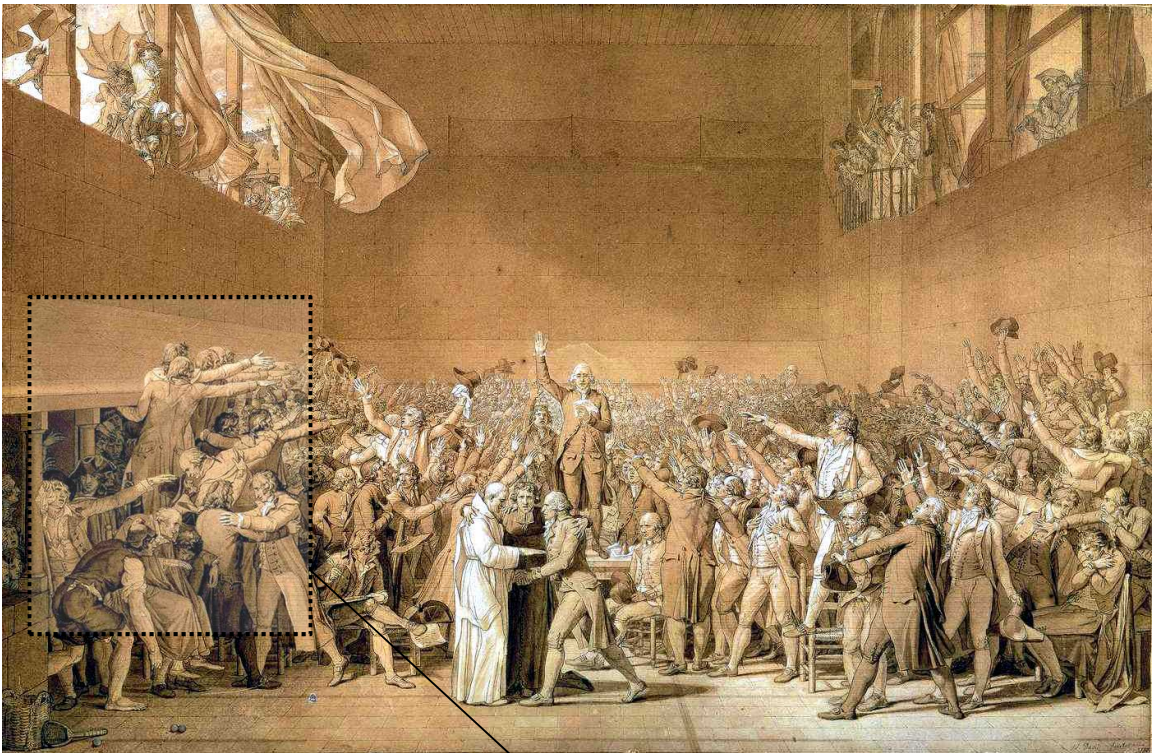


—テニスのうんちく—

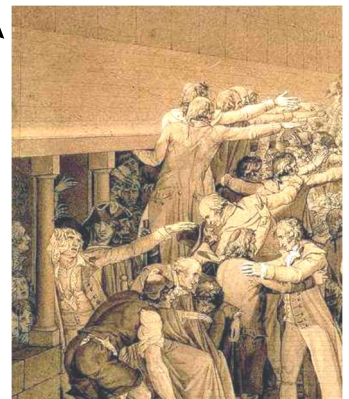
テニスコートの^{ちか}誓い



(1) どこがテニスコートなのか？

みんなが中学生になったら、世界史を学習すると思いますが、上の絵は、歴史の教科書には必ず出て来るフランス革命を象徴される絵画で、「球戯場の誓い」「ジュ・ド・ポームの誓い」（英訳では、テニスコートの誓い）と呼ばれています。1789年6月20日、第三身分（平民）がヴェルサイユ宮殿の球戯場（ジュ・ド・ポームのコート＝テニスコート）に集まって、宣言文を読み、憲法制定を誓い合いました。その時の様子を描いた絵画です。

この絵から、「どうしてテニスコートに集まったのか」「どうして室内にあるのか」「たくさんの方が集まる施設は当時にはなかったのか」「ジュ・ド・ポームはテニスと同じなのか」など、幾つかの？（ハテナ）が生まれます。更に、絵画を注意して見ると、左側の数人が庇^{ひさし}をつかんで立っています。不思議だとは思いませんか？ここは、室内のポーム場です。室内で、雨が降るはずもないのに、どうして庇^{ひさし}がついてあるのでしょうか？



(2) サーブ（サービス）のいわれ

実は、当時の球戯場には庇^{ひさし}がついていて、元々はここにボールを転がして、落ちてきたボールを打っ

ていたようです。「ジュ・ドウ・ポーム」は今のテニスと同じように「サービス」でゲームが始まりますが、今の「サービス」とはやり方がちがいます。ポームを楽しんだ王侯・貴族は球戯場に自分の召使いめしつか（SERVANTサーバント）を連れて行き、コートコートの中央からこの庇ひさしに向かってボールを投げさせたようです。相手のプレイヤーは、庇を転がって来て、ポロリと落ちてくるボールを打ち、ゲームが始まりました。プレイヤーが「サービス」を行うのではなく、召使いが行っていたのです。

「サービス」とは、「神に仕えること（者）」という意味の言葉であったのが、「主人に仕える人」＝「召使い」を意味するようになり、やがて、召使いがボールを庇に投げ入れる行為こういも意味するようになったのです。そして、その行為が主人に対しての「サービス」ということから、「サービス」または「サーブ」と呼ばれるようになったとされています。

(3) 「ジュ・ドウ・ポーム」

「ジュ・ドウ・ポーム」の始まりは、12世紀頃にフランスの修道院しゅうどういん（キリスト教の教えを学ぶために共同生活をする施設）で考え出されたものとされています。「ポーム」は手のひらのことを意味し、初めは手で打っていたようです。

フランスではそれ以前にも、ボールをかべに打ちつけ、はね返ってくるボールを交互に打ち合ったり、ボールを屋根に打ち上げて、転がって落ちてくるボールを互いに打ち合ったりする遊びが行われていました。それが、11世紀ごろになると、修道院しゅうどういんの中庭コート（COURT）で行われるようになります。片側は壁かべ、もう一方は、コートに対して回廊かいろうがあります。その回廊の庇ひさしが、コートに張り出すように出ている、それを、柱が支えているという具合です。これらの壁も回廊の庇も、全部コートとして使われていました。ゲームは庇にボールを投げ入れた所から始まります。落ちてきたボールを打ち返し、ラリーは壁も庇も全部使って続けられていたのです。やがて、修道院では、中庭や室内にネットをはって、手のひらやグローブなどを持って、ボールを打ち合うようになりました。

修道院で始まったポームは、またたく間に、教会、国王、貴族の間に広まります。特に、フランスの歴代の王が熱心にポームを楽しんでいたことから、ポームは「王様のスポーツ」として広く知られるようになりました。16世紀～17世紀にかけては、室内のゲームとして定着し、ポームが広まるとともに、ポーム専用の球戯館きゅうぎかんが造られます。最初の絵画きゅうぎかんにも、修道院でポームが行われていた時のイメージがそのまま使われていたため、壁、回廊かいろう（庇ひさし）が設けられてあったのです。

その後、グローブやふとんたたきのような物からラケットが開発され、今のテニスへと発展していきます。

